

# クザーンヌスの宗教寛容の思想

八卷和彦

ニコラウス・クザーンヌスという人物

ニコラウス・クザーンヌス *Nicolaus Cusanus* (一四〇一年～一四六四年) は、ドイツ・モーゼル地方のクースという田舎町の市民階級の家に生まれた。少年の時に故郷を出て、設立されて間もないハイデルベルク大学での一年の勉学の後、アルプスを越えてイタリアのパドヴァ大学に移り、ここでの六年間にわたる勉学の後に教会法博士となった。その後、故郷のクースがその司教区に属するトリリア大司教の法律顧問となりつつ、ケルン大学で哲学を学んだ。その後(正確な叙階の年月は不明であるが一四三〇年までには)聖職者となった。

当時、ドイツ出身の、それも市民階級出身の聖職者がローマ・カトリック教会の枢機卿・司教にまで栄進することは異例なことであったが、クザーンヌスは一四五〇年代にその例外的存在の一人となった。

彼は、若いときからキリスト教以外の宗教についての関心が高く、一四三〇年代前半にトリリア大司教の法律顧問として参加したバーゼル公会議(一四三二年～一四三七年)においても、ほぼ同年齢のスペイン出身のセゴビアのフアンからイスラームについての知識を蓄えた。さらに、コンスタンツ公会議(一四一四年～一四一八年)以来ローマ・カトリック教会の世界で大問題になっていたフス派との交渉に際してローマ教皇側の一員として同席するなど、彼は

若くして宗教的紛争の調停という場で実践的活動に携わった。

このような彼の働きの頂点は、一四三七年から一四三八年にかけて教皇使節の一員に抜擢されてビザンツ帝国（東ローマ帝国）の首都コンスタンティノープルに派遣され、存亡の危機に瀕していた同帝国の国教であるギリシア教会（ギリシア正教）とローマ・カトリック教会との合同の實現に尽力したことであった。

この教皇使節は、バーゼル公会議における多数派であった公会議派が派遣した使節一行との競合関係の中で、一足先にコンスタンティノープルに到着した。その結果、ビザンツ帝国の皇帝ならびに教会との交渉相手になることに成功した上で、この両者をローマ教皇の主催するフェララ公会議に招聘することが実現できた。

それゆえにクザーヌスたちの帰途はきわめて華々しいものであった。フェララ公会議に向かうことになったビザンツの皇帝ならびに教会の貴顕一行と約二カ月にわたる船旅

を共にしたのである。その上に彼はその旅の船上で *Docta ignorantia*（覚知的無知）という、彼のその後の生涯にわたって通奏低音として響き続ける思想を、神の賜物として受け取ったのである。それは、その約二年後に著された *De docta ignorantia*（『覚知的無知について』）の末尾に記されている。<sup>①</sup>この賜物の授与は、彼が数か月にわたって教皇特使として困難な旅と交渉を遂行すると共に、コンスタンティノープル滞在中のわずかな時間的すき間を活用して現地でしか得ることのできないイスラームについての情報を集めたという事実<sup>②</sup>に示されているような、極めて強靱で集中的な思索活動の賜物であったに違いない。

彼の尽力もあって成立した教会合同であるが、ギリシア教会内部での強力な反対論によって長続きすることはなかった。そして、西側の援助を得られなくなったビザンツ帝国は、長年にわたるオスマントルコの政治的軍事的圧力によって、一四五三年五月末<sup>③</sup>に攻略され、滅亡した。この事実が当時のヨーロッパに与えた衝撃は、二〇〇一年

九月十一日のアメリカにおける同時多発テロの比ではないほどの大きなものであった。なぜならば、これは、イスラーム勢力がボスボラス海峡を越えてついにヨーロッパ大陸に入ってきたことを意味したからである。<sup>3)</sup>

この事実を前にした多くの人々は——クザーンヌスの若い時からの親友で、のちにピウス二世教皇として彼の長上ともなったピッコロミニも同じく——軍事力を整えて実力でトルコを制圧してビザンツを奪還すべきだと考えた。しかしクザーンヌスは、自身が一四五〇年末から一四五二年春にわたって教皇特使としてほぼ西ヨーロッパ全体を査察した経験から、西ヨーロッパの諸侯が教皇に協力してトルコと軍事的に対抗する意思も力もないことを実感していた。そこで彼は、この方向には反対し、あくまでも平和的な解決を求めるしかないと考えて、ビザンツ帝国崩壊の年の九月に *De pace fidei* (『信仰の平和について』) という著作をまとめて、キリスト教世界に対して問題の平和的解決の必要性を説いたのである。

その後クザーンヌスは、自身の考えを教皇に直接に訴えたこともあった。しかし、この努力は実らなかった。一四五八年にピウス二世教皇となった親友のピッコロミニは、十字軍を編成してイスラームを撃つという方針を変えることなく、結局、一四六四年の夏に十字軍の出発地になるはずのアドリア海に面した港町アンコナに向けてローマを発った。これは、西ヨーロッパの諸侯が教皇の言うことに従わなかったので、教皇自らが貧弱な十字軍の先頭に立たねばならなかったということの意味した。そして教皇は出発に際してクザーンヌスに対して、あと数千人の兵士を集めてアンコナに連れて来るように命じた。

クザーンヌスは、自らの意志に反するものであっても長上の命令には従うしかなかった。彼は七月三日より前にローマを出発したことが分かっているが、同じ月の十六日にはアンコナへの道の途中にあるトーディという小さな町で病床に倒れてしまった。ローマからは旧友で医者であったトスカネリが駆けつけて治療にあたったが、薬石効なく八月

十一日にトーデイで六三歳の生涯を終えた。すでにアンコナに着いていたピウス二世も、その三日後、八月十四日にその地で亡くなった。非現実的で時代遅れであった「十字軍」という教皇の夢想に斃れた二人と言うべきであろう。<sup>①</sup>

#### クザーヌスの宗教寛容に関する主張

#### 覚知的無知 *docta ignorantia*

クザーヌスの哲学的名著の一つとされている『覚知的無知について』の核心的思想の一つは、「厳密な真理には、われわれは自力では到達できない。それは我々の無知の闇の中で、把握できない仕方であっている」というものである。<sup>②</sup> この思想に立つ限り、いかなる現実中存在し機能している宗教も、つまりローマ・カトリック教会さえも、その現実的な存在としては、自己が絶対的な真理に到達していると主張できないということになる——この点については、後にさらに検討する。

#### Connata religio (生得的宗教心)

もう一つ、宗教の複数性に関わってクザーヌスの思考において重要な役割を果たしている思想は、*connata religio* (生得的宗教心)<sup>③</sup> というものである。これは一四五〇年の著作 *De mente* (『精神について』) から姿を現わすものであるが、永遠な生という至福を求めることとしての宗教心が、万人に本有的なものとして存在するという思想である。

『精神について』という対話篇の冒頭近くに次のような場面が設定されている。永遠な生の確証をうるために世界中を旅した後にはローマに到った一人の哲学者がローマの或る橋の上で、一四五〇年という「聖年」にカトリック世界のあらゆる地域からローマに巡礼に來ている民衆の群れを見て、かくも多様な人々が信仰という一つの目的のためにここに集まって来ている、という事実に驚かされた。それについて、この著作の締めくくりの部分でこの著作の主人公である無学者 *idiotus* が哲学者に以下のように説くのである。「われわれの内に生まれつき備わっている宗教心 *con-*

nata religio が、今年、これら無数の人びとをローマに導き、それゆえに哲学者である君を激しい驚きに導いたのだ。しかしこれは、この世界においてはたえず多様な仕方で見られてきている」。

この一四五〇年の著作における *conata religio* という概念は、カトリック世界の民衆に生まれつき備わっているという意味で用いられているのであるが、一四五三年に著された *De pace fidei* (『信仰の平和』) においては、この概念の適用範囲が極限まで拡大されて、人間であればあらゆる人間に備わっているものとされることになる。クザーヌスはそこで、万人に生まれつき備わっている宗教心が、幸福でありたいという、同じく万人に生まれつき備わっている希求を満たそうと努めている、としているのである。

*religio una in rituum varietate* (多様な儀礼の中に一つの宗教心が)

この思想が説かれている著作も、先に言及した *De pace*

*fidei* (『信仰の平和』) である。これは、この著作の第一章における大天使の発言とされているのであるから、クザーヌスが大いに強調したい思想であると見なすことができる。この意味するところを明らかにするためには、ここで言われている *ritus* 儀礼と *religio* 宗教との関係をいかなるものとしてとらえるかが、まず大きな問題となる。以下で少し詳細に検討してみよう。

(一) 一つの宗教には、通例、一つの儀礼体系が存在する。  
(二) 一つの宗教の内部であっても、例外的に多様な儀礼が存在しうる。たとえば、クザーヌスの時代におけるトリック教会の聖餐式において、パンはすべての会衆に授けられるが、葡萄酒は聖職者にだけ授けられるのか、それとも葡萄酒もすべての会衆に授けられるのかという問題があった。後者の容認を主張したのがフス派であった。そして、若きクザーヌスがそれとの調停交渉にあたったことは、すでに言及した。

(三) (上の二とを前提にすると)「多様な儀礼の中

に一つの宗教が存在する」ということは、例外的にしか成立しない。

(四) すると、クザールヌスが言っていることが意味を持つためには、クザールヌスの言う「儀礼」とは何か、「一つの宗教」とは何かが、さらに問われねばならない。

クザールヌスが若い時から準拠している新プラトン主義の思考の枠組みを顧慮するならば、ここで言われている「一つの宗教」*religio una*とは、現実に存在するどれか一つの宗教を意味しているわけではないはずだ——もちろん、クザールヌスが教皇代理・枢機卿と司教とを務めているローマ・カトリック教会でもないはずだ。

では、現実のローマ・カトリック教会はどういうことになるのだろうか。実はこの間は、論者自身が西欧の同僚から繰り返し問われてきたことであるが、ローマ・カトリック教会も含めて現実に存在するもろもろの宗教のいずれも、ここでクザールヌスのいう「宗教」ではなく「儀礼」とみなすべきなのである。すると、上の「多様な儀礼の中に

一つの宗教心が」という言明は、現実に存在している諸々の宗教は、そのいずれもが、新プラトン主義的な意味でのアイデアとしての「一つの宗教心」を表わす「影」ということになる。この捉え方は、すでに言及した「覚知的無知」の思想に裏打ちされているのである。

このように考えるならば、現実に存在している宗教の間で、いずれが真理を教えているのかという争いは意味を持たなくなり、争いは止むことになる。これがクザールヌスが当時考えていたことであるはずだ。

*Signa mutationem capiunt, non signatum* (印が変容し

ても、印で表わされるものが変容するわけではない)

この思想も、同じく『信仰の平和』において、以下のよう

に述べられているものである。「  
魂の救済は、業(わざ)によってではなくて、信仰によつてである。……諸々の儀礼は、信仰の真理の感覚的な印として定められ採用されているに過ぎない。さ

らには、諸々の印が変容を受けても、印で表わされるものが変容するわけではない。<sup>15)</sup>

この一文で言われていることを、少々子細に検討してみよう。まず、儀礼は感覚でとらえる印 *signa sensibilia* に過ぎないとされている。確かに宗教的儀礼は、それを執行する人間が感覚によって把握できるものであり、それは人の内面的な動きとしての信仰が、個人的に執行されるにせよ集団で一斉に執行されるにせよ、同様である。むしろ、儀礼は感覚でとらえるものであるからこそ、それを執行する者にとって意義を感じることができるのである。

次にクザーヌスは、印 *signa* が変容しても印で表わされるもの *signatum* は変化しないとしている。これも意義深い指摘である。具体的に考えてみれば、同じ一つの天体としての太陽が、言語の異なるにに応じて、日本語で「太陽」、英語で *sun*、ドイツ語で *Sonne*、フランス語で *soleil* というように、異なった語（つまり印）で変容を受けて表現される。しかし、それぞれの語が指示しているもの自体（太陽）

が変容をこうむることはない。

この事情を、先に考察した儀礼と併せて信仰そのものに適用するならば、どういうことになるだろうか。すると、諸宗教において見いだされる多様な儀礼は、実は万人に共通な一つの信仰の諸々の印 *signa* であることになり、信仰をもつ人々がそれぞれの習慣と伝統に応じて多様に執行するとしても、その多様性のゆえに信仰の対象そのものが変容されたり毀損されたりすることは生じないということになる。

それゆえに、どうしても儀礼において「様式上で一様性が見いだされない場合には、諸民族に各自の勤行と儀式が許されてよいのだ」とクザーヌスは指摘する。<sup>16)</sup> なぜならば、認識能力において本性的に限界を有する人間という存在は、自己中心性から完全に脱却することが困難であり、自分たちの慣れたものだけが正しいものであると判断しやすいからである。

## 宗教活動一般における多様性の根拠とその容認

クザーヌスの宗教寛容の思想における特徴は、極めて現実的であることである。彼は『信仰の平和』の冒頭近くで、神は世界の各民族に王と預言者を選び立てていて、彼らは、神の名を用いて儀礼と法を定めて、粗野な民衆を教化しているのであり、民衆は、それらを神自身の語りかけのよう⑤に受け入れてきているのだと指摘している。これは、クザーヌスの生きていた時代のほとんどすべての宗教において見られた状況を、キリスト教的に捉えたものであると言えるであろう。神が世界の各民族に王と預言者を選び立てていたかどうかは別にしても、民衆はそれぞれが生きる社会における指導者の定めた「儀礼と法」を「神自身の語りかけのように受け入れてきている」ということは事実であったらう。

さらにクザーヌスは、信仰の多様性が容認されるべきことについていっそう深い確信をもっていた。それは、「神はそれぞれの人に合わせて自己を啓示してくれる」という

思想である。これは、*De visione dei*（神を観る）について⑥という、『信仰の平和』が執筆されたのと同じ年に、これに引き続いて記された書物に明確に述べられているものである。⑤

以上の視点からとらえ直せば、世界において見いだされる儀礼や法の多様性は、それぞれの民族に適切なものとして神から付与されたものであることになる。しかしながら現実の人間は、先に述べたように、自己中心性から完全に脱却することが困難であり、自分たちの慣れたものだけが正しいものであると判断しやすいので、儀礼や法の多様性を容認することが困難であって、この点が紛争の原因となることが多いのである。⑥

だからこそ、クザーヌスは上掲の多様性容認の必要性を力説しているに違いない。

「宗教は、精神性と時間性の間で安定することなく動揺している」

ある特定の宗教を信じる者あるいはそれを組織し維持する立場にある者が自己の正統性を主張する時には、その内実が変化することはないと主張するか、変化をさせる(改革する)ことを意図する場合にも、変化してはならないものとしての本来あるべき姿に復帰させるのだ、と主張するのが一般的であろう。

ところがクザーヌスは上掲の文章を、『覚知的無知について』に引き続いてまとめられたと推定されている、彼の第二の哲学的著作である *De coniecturis* 『推測について』の中でしたためているのである。その際に彼は、ライン河の流れは一見、いつも安定していて変わることがないようであるが、実は時に応じて水かさが増減したり、水面が上下したりして変化するように、そのように宗教も精神性と時間性の間で安定することなく動揺しているのだと説いている。河の流れの変化を例示するのであれば、彼の生家の目

の前を今も流れるモーゼル河でもいいはずだが、やはり当時の多くの人が知っている大河、そして当時、彼が司祭職を得ていた聖フローリン教会の近くを流れるラインの方を挙げたのであろう。

ここでクザーヌスは、熱心な信者ほど変化することがないものとしてとらえやすい宗教も、変化するものであり、歴史性を有しつつ存在していると、主張しているのである。これは、彼の最初の大きな書物としての『普遍的協和論』*De concordantia catholica* (およそ一四三二年)にも既に見いだされる、キリスト教についての彼の歴史意識の現われである。この書物では、キリスト教世界の皇帝ならびに教皇の模範的あり方を過去にさかのぼって探求した上で、それを提示することで当時の神聖ローマ帝国における皇帝と教皇のあり方への批判を展開しているのである。<sup>8)</sup>

この著作をまとめた当時のクザーヌスは、まだ聖職者になつて数年しか経ていない若者であったが、『推測について』をまとめた頃には、上掲の教皇特使の任務を成功裏に

果たして、すでに有能な若手の教会政治家の一人として、活躍の舞台を主としてドイツにもつ人物となっていた。そのクザールヌスが、このように記して、自身の属するローマ教会の現状を歴史的に相対化する視点を明示しているのである。

この視点は、クザールヌスが枢機卿・司教にまで栄進した晩年に至っても維持されており、これに依拠しつつ彼は、ローマ教会の、とりわけ教皇庁の改革案を、教皇からの依頼に基づいてまとめた。それが『全面的改革』*Reformatio generalis*（一四五九年）であるが、彼は教皇にその実行を強力に求めた。改革案の一端を具体的に記すならば、彼は枢機卿 *Cardinalis* という名称の語源である「蝶番」*cardo* から枢機卿のあるべき姿を導き出すとともに、毎日、各枢機卿が代表している管区の民衆のことに教皇庁内から各枢機卿が思いを馳せるべく、毎日小さな公会議を開催するべきであるとして提唱したのである。<sup>⑧</sup>

## 信仰による相対化

「信仰による相対化」と記すと、「信仰による絶対化」の誤記ではないかと思われるかもしれない。しかし、ここでいう「信仰」とは、もともと深い意味でのそのことである。以下でこの点について説明する。

既にも確認しておいたように、クザールヌスによって想定されている *religio* とは、まずは万人に生得的にそなわっている信仰心という意味であって、「宗教」という制度ではない。現代において「宗教」が一般に捉えられているものとしての「制度」とか「集団」という意味と対比的に表現するならば、ここでの *religio* とは人の心の「機能」*function* である。そしてそれは、既に引用して示した『精神について』の記述にもあったように、この世界においてはたえず多様な仕方でしか現れないのである。この事態を、より具体的に説明するならば、人間が普遍的に有する「言語能力」と、その人間が実際に使用する「言語」は、特定

の日本語とか英語とかのように、互いに異なりをもつたものとしかなりえない、という関係と同様であると言えらるる。<sup>20)</sup>

このような状況に、クザーヌスの思考において通奏低音として響いている〈覚知的無知〉の思想を併せて考察すると、そこに「信仰による相対化」と表現した事象が機能してくるのである。つまり、個々の信仰をもつ者に〈真理〉が現れるのであるが、それは決して〈絶対的真理〉というわけではなくて、「その者にとつての真理」であることになるからである。

確かに一四五〇年以降のクザーヌスにとっては、〈真理〉はこの世界にも叫び声あるいは呼び声として現れるものとして捉えられるようになっていた。<sup>21)</sup>しかしながら、それは、既に言及した『神を観ることに』について『具体的に記されているように、「その者にとつて示される真理」なのである。それゆえに、その真理に出会った者はそれが、他の人に対しても自分と全く同様なものとしてのそれに出会うべきで

あると主張できるものではないということを、弁えねばならないのである。

ところで、クザーヌスの晩年の著作、すなわち既にピザンツ帝国が滅亡させられてコンスタンティノーブルがイスタンブルになってしまった時代、しかしピウス二世教皇は十字軍によってコンスタンティノーブルをトルコから奪回するという夢想を捨てていなかった時期の著作に、すでに註<sup>22)</sup>で言及したことのある『コーランの精査』がある。その冒頭には、コーランの精査をするためにクザーヌスが用いるとされている解釈の方法論が記されている。それは、*pia interpretatio* というものであり、これを文字通りに翻訳すると「敬虔な解釈」となる。この解釈方法を成立させているのは、クザーヌスの以下のような想定である。コーランの意図にはムハンマドの意図を超えた内容も含まれているが、それに彼は気づいておらず、<sup>22)</sup>そればかりか、コーランにはコーランの表現をも超えて神の真理が含まれているというものである。<sup>23)</sup>クザーヌスはこうして *pia inter-*

「pretatio」をコーランの内容に適用することで、キリスト教の教えと共通するものをコーランの中に見出してゆき、そのことで、キリスト教とイスラームとの間に平和的共存が成立することを念願しているのである。

実はさらに、この解釈法を「pia interpretatio」と名付けたのにはクザーンヌス独自の意図があるのではないかと、思われるのである。彼の長上たる教皇は、すでに言及したように十字軍をもって軍事的にトルコを攻略することを意図し続けていたピウス二世であった。この教皇に、あなたの名前のもつ意味に忠実に、この「pia interpretatio」という解釈法のつとめてコーランを解釈してほしいと、クザーンヌスは言外に呼び掛けていたのではないだろうか。この論者の推測は、クザーンヌスが晩年にまとめた『全面的改革』において彼が、教皇庁内の各役職者は、その名称にふさわしく生きねばならないと、述べているという事実からも裏付けられるであろう。

さらに、いわば〈覚知的無知〉という思想をコーランと

ムハンマドに適用する、この「pia interpretatio」という解釈法は、それが上述のような基本構造を有するものであるゆえに、より大きな射程をもちうるものである。すなわち、この視点は、クザーンヌス自身も属するキリスト教の側にも妥当することになるはずなのである。

ムハンマドに啓示として現れた内容としてのコーランをムハンマド自身も完全には理解できておらず、さらにコーランにはコーランの表現を超えた神の真理が含まれているという想定は、キリスト教における聖書の理解にも適用されるはずだからである。さらには、クザーンヌス個人についても、このことは妥当なのである。実は、『信仰の平和』の冒頭には、コンスタンティノーブルがトルコによって占領されたという報に接した、その地をかつて訪れたことのある或る人物（クザーンヌスのことであろう）が、深甚な悲嘆に打たれつつ神に祈って、諸宗教の儀礼の多様性ゆえにきわめて凶暴なものとなっている迫害を、神の慈悲によって制止してほしいと願いつづけたところ、数日後にこれから

述べるような観念が現れたので、その内容を以下に書き記す、という趣旨のことが記されているのである。さらには、本稿冒頭近くで言及した、神からの賜物としての〈覚知的無知〉 *docta ignorantia* の思想も同様に、クザールヌスがコンスタンティノーブルからの帰途の船上で得たものであった。

すると、キリスト教の総体についても、これまでのキリスト教における理解が足りていないことが残っている可能性があることになり、またクザールヌス個人についても、その得たものが真理を含みつつも、そこには彼自身も気づかない真理が含まれている可能性を排除しないということになるのである。奇異に響くかもしれないが、それがクザールヌスの思考に忠実な理解になると、論者は考えている。

#### クザールヌスの宗教寛容の思想的現代的意義

最後に、このようなクザールヌスの宗教寛容の思想は、現

代の関連する思想といかなる関係に立ち得るかという点について、短く言及する。

#### 「包括主義」の先駆である

もしクザールヌスの言う「一つの宗教」が、従来の欧米の研究者の大方がしている理解のように、現実のキリスト教を意味していたとするならば、クザールヌスの思想は、現代では包括主義 *Inclusivism* と言われるものに分類され得るだろう。これは、ジョン・ヒック (John Hick, 1922-2012) の定義によれば、「他宗教に対して敵対的ではないが、キリスト教が完全な神の啓示と正しい救いの出来事のみ一のものに在り得る」とする立場である。この立場であることを自他ともに認めている一人は、イギリスのカトリック神学者であるデコスタ (Gavin D'Costa, 1958-) である。

#### 「宗教的多元論」の先駆者である

もしクザールヌスの言う「一つの宗教」が、論者が本稿で

試みたように、プラトン主義的分有論に拠る「アイデアとしての一つの宗教」と解釈できるのであれば、クザーヌスの主張は宗教的多元論 *religious pluralism* に分類され得るだろう。

つまり、この場合は、キリスト教も含む現存する諸宗教は、いずれも、「一つの宗教」の下に展開されている多様な儀礼の体系であることになる。この立場を現代において代表してきたのは、ヒックであった。ただし、ヒック自身は、現代に存在する諸宗教を「多様な儀礼の体系」として捉えることまではしていない。

### 註

① 「ギリシアからの帰途の船上で、あらゆる最善の賜物の源である諸々の光の父からの贈りものに導かれて——私にはそのように思われるのだが——、次のような洞察に到達した。すなわち、把握されえないことは、人間の認識能力で知りうる消滅することのない諸々の真理をさえも超越することである」

覚知的無知 *docta ignorantia* において把握されえない仕方では抱擁 (*amplectere*) されるのである」。(De *docta ignorantia*, III, *Epistola*, n. 263 [岩崎・大出訳「知ある無知」(一九六六年、創文社刊)二二〇頁])。なお、以下のクザーヌスの著作についての引用箇所等の指示は、いずれもハイデルベルク版クザーヌス全集 *Nicolaï de Cusa Opera Omnia, Iussu et Auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis, Ad codicum fidem edita (Lipsiae et Hamburgi 1932)* に依拠する。

② これについては、彼の晩年の著書『コーランの精査』*Cribatio Alkorani* (一四六一年)の前書きに記されている。

③ 事実、その後トルコは勢力をヨーロッパ大陸上を西に向かって広げて、一五〇〇年代と一六〇〇年代の二度にわたってウィーンを包囲するほどになった。

④ この辺りの事情については以下の書物が詳しい。E・モイテン著、酒井修訳『ニコラウス・クザーヌス』(一九七四年、法律文化社刊)一六三頁以下。

⑤ *De docta ignorantia* I, XXVI, (n. 89) [岩崎・大出訳、七五頁]。

⑥ ラテン語の *religio* を現代英語の *religion* と同じように、そして、その日本語として「宗教」として理解することは、誤解を生みやすい。この語の元の意味は、制度としての宗教で

はなく、その内実をなす「信仰心」とか「宗教心」であるの  
で、*religio*は「宗教心」と表記する。

- ⑦ De mente, XV, n. 159, 6-9: “*Connata religio, quae hunc innumera-  
bilem populum in hoc anno Roman et te philosophum in vehe-  
mentem admirationem adduxit, quae semper in mundo in modo-  
rum diversitate apparuit*”

- ⑧ De pace fidei, XIII, n. 45, p. 42, 8-10: “*haec spes omnibus commu-  
nis est ex connato desiderio, ad quam sequitur religio, quae pariter-  
miter omnibus consequenter connata existit*” [八巻和彦訳『信仰  
の平和』(「中世思想原典集成」第一七巻(一九九二年、平凡  
社刊)六一九頁)(下線は引用者)。

- ⑨ Ibid., I, n. 6, p. 7, 10f. [八巻和彦訳、五八七頁]: “*cognoscent  
omnes quomodo non est nisi religio una in rituum varietate*.” (多  
様な儀礼の中に一つの宗教心が〔現に〕存在していることを  
万人が認識するはずだ)。

- ⑩ こゝでは *religio* という語を、「制度としての宗教」の意味を  
中心に理解する。

- ⑪ クザールヌス自身もこの問題についてこの著作で論及している  
(De pace fidei, XVIII, n. 66 [八巻和彦訳、六三三頁以下])。  
⑫ De pace fidei, XVI, n. 55, p. 51, 12f; 52, 1f. [八巻和彦訳、六二七

頁以下]: “*non ex operibus, sed ex fide salvationem animae... Ut  
signa sensibilia veritatis fidei sunt instituta et recepta. Signa autem  
mutationem capiunt, non signatum*.”

- ⑬ Ibid., XIX, n. 67 55 [八巻和彦訳、六三七頁]。

- ⑭ Ibid., I, n. 4, pp. 5, 18; pp. 6, 8 [八巻和彦訳、五八六頁]。

- ⑮ De visione dei, VI, n. 19 [八巻和彦訳『神を観る』について  
[二〇〇一年、岩波文庫]三六頁以下]。

- ⑯ クザールヌスの『信仰の平和』冒頭でこの点に言及している：  
De pace fidei, I, n. 1, p. 3, 6f: “*ob diversum ritum religionum plus  
solito saevit*” (諸宗教の多様な儀礼のゆえにきわめて凶暴なも  
のになつてゐるこの迫害 [八巻和彦訳、五八四頁])。

- ⑰ De coniecturis (およそ一四四一年 II, c. XV, n. 149, 8f.: *religio  
intra spiritualitatem et temporalitatem instabiliter fluctuat*.

- ⑱ より詳しくは、拙稿「クザールヌスにおける〈周縁からの眼差  
し〉——De concordantia catholica から Idiota 篇へ」(『文化論集』  
第五号、一九九四年所収 [近刊拙著『クザールヌス思想の射程』  
(知泉書館刊) に所収予定] を参照されたい)。

- ⑲ 詳細は、前掲拙稿「クザールヌスにおける〈周縁からの眼差し〉」  
を参照されたい。

- ⑳ この点については、論者はすでに考察したことがある。以下

の拙稿を参照されたい。八巻和彦『「文明の衝突」の時代の宗教寛容論』(『宗教学研究』第35号〔二〇〇五年、日本宗教学会刊二〇一〇―二〇五頁〕「近刊拙著『クザーヌス思想の射程』(知泉書館刊)に所収予定)。

⑫ このことは、上掲の『精神について』も含まれる一四五〇年夏に著された *Idiota* 篇四部作に、とりわけこれの第一巻『知恵について』 *Idiota de sapientia* の冒頭に顕著である(小山宙丸訳「知恵に関する無学者の対話二〇一年」第一巻『中世思想原典集成』第一七巻〔一九九二年、平凡社刊〕五四二頁以下)。

⑬ *Cribratio Alkorani, Alius prologus*, n. 16, 1.

⑭ *Ibid.*, II, XIX, n. 158, 4-8.

⑮ *Reformatio generalis*, n. 11, 3f.: “quisque... iuxta etymologiam nominis sui et eius causam canonicè vivat. Diffinitur enim vita cuiuslibet in nominis eius diffinitione.”

やまき・かずひ

早稲田大学名誉教授・桐朋学園大学特任教授